紅葉、来襲！

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅葉、来襲！

【Ｎコード】
Ｎ８０４５Ｚ

【作者名】
鷹嶺綺羅

【あらすじ】
ヴァルキリーズ・ストームでお馴染みの紅葉が学園へ！？「ぱらのいあな日記」削除に伴い移動しました。

授業のため、職員室を出ようとしたかなめを、南雲が呼び止めた。
「福井先生、水瀬から電話です」
「水瀬から？」
首を傾げながら、かなめは南雲から受話器を受け取った。
「もしもし？――――ああ。水瀬か？……何？ルシフェルと一緒に休みたい？仕事か？」
二言三言会話したかなめが、突然、受話器に怒鳴った。
「グタグタ抜かしてないで、とっとと来いっ！」
ガンッ！
受話器を叩き付けられた電話が机の上で砕け散った。
「せ、先生！？」
職員全員が驚きの視線を向ける中、ポニーテールを角の如く逆立てたかなめが南雲に怒鳴った。
「南雲っ！」
「は、はいっ！」
「あの二人、登校してきたら生徒指導室に押し込んでおけっ！」
「はっ？」
「五月病で休みたいなんてぬかすバカの性根、たたき直してやるっ！」

「――――大体」
昼休みになってようやく教室に戻れた水瀬達を前に、あきれ顔の美奈子が言った。
「何だって、五月病で休みたいなんて言い出したの？」
「だって……」
「私達の身になれば、わかるよ」

「水瀬君はともかく、ルシフェルさんまで？」
真面目で通るルシフェルが仮病を使ってでも休みたがる理由。
それが、美奈子にはわからない。
「何があったの？私には話せないこと？」
「……一昨日」
水瀬が言った。
「一昨日、三年生に転入生が入ったの、知ってる？」
「ああ。未亜が何か言っていたような」
「その人が原因」
「……近衛の関係者？」
水瀬達は、無言で頷いた。
「ってことは、そんなに厄介な人なの？」
「近衛であれ以上に厄介な人って、いない」
「ルシフェルさんがそこまで言うとは」
美奈子は、驚いた視線を水瀬に向けた。
「水瀬君以上ってことだよね？どんな人？」
「ぷうっ！桜井さん、失礼だよ！」
「だけど――――」

「おい、水瀬、ナナリ」
入り口にいた男子生徒が声をかけてきた。
「お客だぜ？三年の」

ガタッ！
美奈子の前で、水瀬達があからさまな狼狽を見せた。
「ぼ、僕達、いないって言って！」
「いるじゃないっ！」
水瀬の声より一段階高い声が教室に響き、教室に女子生徒が入ってきた。
リボンは三年生。

ただ、外見はかなりあどけなく、外見上は水瀬と同い年といっても過言ではない。
つまり、幼い。
「何よ！さっさと来いってメールしたのに無視して！」
「で、電池が切れてまして……」
「わ、私……ちょっと急用が」
「――二人とも」
女子生徒は、平べったい胸元を人差し指で突いた。
「わかってるね？」
「……」
「……」
水瀬とルシフェルは、青い顔をして席を立った。

「あ、四方堂先輩」
心配になって水瀬達を探しに出た美奈子は、三年の廊下で生徒会長の四方堂緑とすれ違った。
ロングヘアーをリボンで束ねた知的な眼鏡っ娘。
騎士養成コース在学中だが、本人の騎士ランクはかなり低い。
「あら？桜井さん」
両手で書類を抱きかかえ、ほくほく顔の緑に、美奈子は訊ねた。
「あの……水瀬君達見ませんでした？」
「えっ？知らないけど」
美奈子は、先程訊ねてきた三年生の女子生徒のことを緑に告げた。
「ああ。紅葉ちゃんのことね？」
「紅葉？」
「ええ。津島紅葉。数日前に転入してきた子。水瀬君とも知り合いだったのね」
「……知り合いというより、水瀬君達を従わせていたようにも」
「ふぅん？」

「水瀬君達の態度からして、嫌々連れて行かれているって感じなんですけど」
「そう？」
「……あの？」
美奈子は緑の態度が不思議で、思わず訊ねた。
「普段の四方堂先輩なら、少しは心配してくれると思ったんですけど」
「別に？紅葉ちゃんだから」
「先輩」
「はい？」
「何か、積まれたんですか？」
「えっ？ははっ。紅葉ちゃん、メサイアについて滅茶苦茶詳しくて、非売品の写真とか、いろいろもらっちゃったのよ」
「それで黙っていてくれと？」
「うん♪生徒会は、紅葉ちゃんについては、一切関与しませんって念書あげたもん♪」
メサイアの前には人権も規律もへったくれもない。
常日頃からそう豪語するメサイアオタク。
それが、目の前にいる四方堂緑という人物だ。
「……で、津島先輩、今、どこに？」

結局、美奈子が水瀬達と再開できたのは、保健室だった。
「ったく、情けないわねぇ」
保健室のベッドの上で唸る二人を前に、憮然とした表情を浮かべるのは、紅葉だ。
「何よ。あの程度で動けなくなるなんて、それでも魔法騎士？」
「そ……そうはいいますけど」

水瀬達は痛む体で紅葉に文句を言った。
「光速で飛んでくる飛翔物体をあんな風に……」
「大体、あれ、何の役に立つんです？」
そんな二人に、紅葉は情けがなかった。
「え？――――えっと」
しばらく考えた後、紅葉は笑いながら言ったのだ。
「忘れちゃった♪」
「……」
「……」
「ま、やってれば思い出すから♪さ、二人とも、クスリが必要なら」
紅葉がどこからか取り出したのは、一抱えもあるような極太の注射器。
「この――――よっと、“逝き帰りX”を打てば、致死率９９％の確率で確実に」
「死ぬ、死んじゃいますっ！」
「大丈夫よ――――理論上は」
「それ、人間相手の理論なんですか！？ね、どうなんです！？」
「え？自信ないなぁ……えっとぉ……何相手に研究したんだけっけ？」
「僕達にも人権が！」
「うるさいっ！中佐の命令に少佐が逆らうなっ！」
――――結局、二人が何の実験をやっていたのか？
その答えは、ついにあかされることはなかった。
理由？

答え：紅葉が忘れ去ったまま、他の研究に没頭するようになったから。

合掌。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8045z/

紅葉、来襲！

2011年12月25日19時47分発行